

いのち 生命のにぎわいとつながり

生物多様性ちば ニュースレター No.17 平成22年 3月23日

春を迎え、だんだん暖かくなっていく中で、生き物たちの動きも活発になってきました。この春という季節に1年で最も生命のにぎわいとつながりを感じる方も多いと思います。

本号では、川と海の生態系のつながりから見た水の中の春の訪れについて掲載しました。また、「企業と生物多様性」セミナーや生命のにぎわい調査団の取り組みを紹介します。

春の足音～川と海を行き来する生き物たち～

尾崎真澄：千葉県生物多様性センター

春を感じる生き物たち

立春も過ぎ、日毎に日が長くなっていく頃、水の中でも生き物たちがざわめき始めています。

みなさんは、どんなことに「春」を感じているのでしょうか？頬にあたる柔らかな風、沈丁花の香り、それともお店に並ぶ桜色のお菓子たちでしょうか？

さて、水の中の生き物たちは、どのように季節を感じているのでしょうか？多くの生き物たちは、日の長さや水温などで感じているようです。

春まだ浅い2月の下旬、外房を流れる川の下流域では、海辺近くで生まれたモクスガニの子供たちが、上流を目指してのぼり始めているところに会えます。甲羅の幅が1～2センチの小さなカニですが、一步一步、横へ横へと進んでいきます。遙かなる上流まで成長をし続けながら。

3月の最初の大潮の頃、次に海からやってくるのはイトヨです。イトヨは「トゲウオ」と呼ばれる魚の仲間、海と川とを行き来する「遡河回遊性」と淡水で一生涯を送る「河川残留性」がいます。房総半島の河川

に遡上してくるのは、「遡河回遊性イトヨ」のうち「日本海型」と呼ばれるタイプであることがわかってきました。これらは、太平洋側での出現例の南限であると考えられます。

3月も10日を過ぎる頃、川の水温も10℃前後に上昇してきます。この頃になると、川の河口付近にアユが集まってきます。そう、これから川の上流へと上り始める準備が始まるのです。房総半島を流れる河川でも川によっては、20～30万尾ものアユが遡上することが知られています。

さて、アユがどのような暮らしをしている魚なのか、みなさんはご存じでしょうか？

川の清流を代表する魚であるアユは、初夏の風物詩である「アユの友釣り」を思い浮かべるように、初夏から秋までを川の上中流域で過ごします。「友釣り」は、川で生活するアユが餌場をめぐるなわばり行動を持つことを利用した釣り方です。餌場とは、餌となる藻類が生えた川底の石のことで、アユは川では附着藻類を削り取って食べているのです。

秋になるとアユたちは、川を下り、下流の砂利のあるところで卵を産みます。砂利に附着した卵は、二週間前後で孵化し、孵化した仔魚はそのまま海まで流されていきます。海に漂うアユの子供たちは、春までの間、沿岸の波打ち際で動物プランクトンを食べて成長していきます。真冬の海の波打ち際にたくさんのアユ



上流を目指すモクスガニ
(夷隅川 平成22年2月)



房総半島の河川に遡上してきたイトヨ
(夷隅川 平成16年4月)

が泳いでいることは、最近まであまり知られていませんでした。

川の河口付近に集まったアユたちは、淡水でも暮らせるように体を馴らしていきます。そして、食べ物をこれまで海で食べていた動物プランクトンから「附着藻類」などの植物へと変化させます。そうこうしているうちに、アユたちの群れはあっという間に大きくなっていきます。真っ黒の群れになったアユたちは、海と川の水温差が小さくなるとともに体の大きな順に川を上り始めるのです。



アユの遡上調査（夷隅川 平成16年4月）
特別採捕の許可を得て実施しています。

旅立ち

上流へと遡上を始めたアユたちには、幾度となく立ちはだかる壁があります。堰などの人工構築物です。現在では多くの堰などに「魚道」が設けられていますが、段差が大きかったり、入り口を魚が見つげづらかったりするなどの問題点がある魚道も少なくありません。魚道を上ることに戸惑ってしまい、堰等の下に溜まってしまったアユたちは、カワウやサギなどの鳥類やスズキやウナギなどの肉食魚の餌となってしまいます。

いくつもの壁を乗り越えながら、上流の清流域まで一気に遡上します。多くの試練を乗り越えたアユたちは6月の釣り解禁の日までには、なわばりを持った立派なアユにまで成長するのです。

秋を迎えたある日、まとまった雨による増水をきっかけに、アユは産卵のために川を降ります。下流域に形成された砂利場の「瀬」を見つけると、そこで産卵を行い、1年の短い一生を終えます。



遡上してきたアユ（夷隅川 平成16年5月）

川と海を行き来する生き物たち

前述したモクスガニ、イトヨ、アユのほか、ウナギ、サケ・マス類、ワカサギなどの魚類やテナガエビなどの淡水エビ類などが川と海を行き来する「通し回遊」を行うことで知られています。そして、これらの多くは水産有用種として人間が利用している生き物たちです。一部の種類には「河川残留性」と呼ばれる海を必要としないタイプも存在しますが、その多くは川と海の両方を必要とします。

彼らの子孫を永久に残していくために、自然からの恵みをいつまでも享受できるように、彼らの前に立ちはだかる壁を立ててはならないと考えます。

来年もまた、彼らの姿が見られるように。

「企業と生物多様性」セミナーを開催中

音谷紗絵：千葉県環境生活部自然保護課

企業と生物多様性

環境に対して多くの企業が取組をおこなっています。平成21年12月10日～13日に環境をテーマに東京ビッグサイトで開催されたエコプロダクツ2009（国内最大の環境展示会）では、来場者が18万人を上回りました。多くの企業が出展し、自社の取組の紹介や商品の宣伝をしていました。

今年度は、環境省により“生物多様性コーナー”が設けられ、企業や千葉県による展示も行われました。温暖化問題だけでなく、生物多様性問題に対しても企



エコプロダクツ2009



生物多様性コーナー

業の取組が始まっています。

しかしながら、生物多様性の問題は、言葉自体も分かりにくく、その対応も、一律ではなく、その地域ごと、その企業ごとに必要です。さらに、具体的な数値目標も立てにくいいため、取組に踏み出せない企業が多いのも現状です。そこで、千葉県では先進的な企業の事例紹介や、企業と生物多様性の関係などの情報提供をする連続セミナー“企業と生物多様性”を開催しています。

第1回セミナー

企業が生物多様性に取り組むメリット

第1回目は平成21年12月1日に千葉県教育会館にて開催し、千葉県生物多様性センターから、千葉県の課題について説明し、その後、2005年に建設業界では初めて、“生態系行動指針”を掲げられ、先進的な取組を行っている鹿島建設株式会社に御講演をして頂きました。自社の取組の紹介に止まらず、なぜ企業が生物多様性の問題に取り組むのか、取り組む事のメリットなども話して下さいました。

参加者からは、「生物多様性という言葉始めて聞いた。企業でも取組めることが多いと知り勉強になった」「生物多様性に対する視野が広がった」などの感想を頂きました。

第2回セミナー 生物多様性とマーケティング

第2回目は平成22年2月1日に千葉県教育会館にて開催しました。千葉県生物多様性センターから人々の活動と生物多様性について説明し、その後、生物多様性条約市民ネットワーク生態系と生物多様性の経済学ワーキンググループ長の服部徹氏（NPO法人アースデイ・エブリディ）から、生態系と生物多様性の経済学（TEEB）の紹介や、生物多様性に対する生活者の認識アンケートの結果を報告して頂きました。

「企業としてどのような取組をしていくべきか模索中だが参考になった」「会社として何かしなければいけないことを感じた」などの感想を頂きました。

おわりに

生物多様性の保全には、多様な主体の参画が必要不可欠です。第3回セミナーでは、企業向けのセミナーではありますが、一般の方にも参加を呼びかけております。（巻末のお知らせ欄参照）

企業、NPO団体、県民、行政、“みんな”で、この問題に取り組んでいきましょう。



セミナーの様子

生命（いのち）のにぎわい調査団フォーラムを開催

柴田るり子：千葉県生物多様性センター

県民参加型の生物モニタリングとして始まった当調査団は、昨年に引き続き第2回となる「調査フォーラム～ちばの生物多様性を知るために～」を1月30日（土）に県立中央博物館講堂で開催し、約70名の参加がありました。

調査団設立後1年半が経過し、団員は480名、報告件数は3,000件（月平均170件）を超えるなどモニタリングとして定着しています。報告は取りまとめて種ごとの発見地図に加工し、今後は県レッドデータブック等の情報に活用されます。

団員からは、調査対象57種以外の希少な種の報告・写真が多く寄せられ、鳥類や昆虫などの分野では、熱心な団員が増えているため、情報提供・観察発表の場を企画したところ、5名が発表しました。参加者からは、それぞれの観察内容は高く、生息地の保全のための考察などを加えた立派な研究であり、もっと聞きたい、密度が濃いフォーラムであったとの感想が寄せられました。

講演と調査団の取りまとめと今後の活用

フォーラムの前半では、初めに、生物多様性センターの齋木健一から「図鑑を持って出かけよう」と題して講演を行いました。なぜ生きもの（植物）の名前を調べるのか、わかれば記録になり、調べて自然環境の違いがわかる。図鑑の選び方、絵合わせ図鑑、検索図鑑、線画、写真（花より葉、植物体）など、図鑑の得意分野を知り、図鑑を選ぶことの楽しさを伝えました。

続いて、「調査団の報告結果と今後の活用」として、事務局から、団員の構成状況、報告3,000件のうち多い種（キジ、カワセミ等鳥類）の特徴、種ごとの発見地図、季節報告（モズ高鳴き）の年比較などを解説しました。今後、報告は、県レッドデータブックにおいて活用されることを説明するとともに、当センターの業務や国際生物多様性年の説明を行いました。



フォーラムの様子

団員からの情報提供「観察事例の紹介」

後半は、団員5名から観察事例の発表がありました。

- ① 「ヒメゲンゴロウがやってきた」(小谷蒼さん：小2) 水槽に飛来した虫を調べ：ヒメゲンゴロウと知り、どこから来たのか、どこに住んでいるのか、飼うために水槽を作り、ヒメゲンゴロウと自分(人)の関係まで考えていきました。この研究により、全国コンクール「第13回図書館を使った調べる学習賞」で小学生低学年の部で第1位となる大臣奨励賞を受賞されました。
- ② 「初音をもとめて」(柴田清治さん) 千葉市緑区の大藪池で、鳥の初鳴きや池周辺の生き物を観察して、地元小学校でボランティア講師として説明するなど活動されています。季節の生きものを毛筆で写実的に描いた「はなみずき通信」を季刊し、公民館等で展示して冊子にまとめました。
- ③ 「千葉市の中心部に残された希少生物の観察とその環境」(高見等さん) 千葉市若葉区で自然観察活動を中学校の生徒と行い、発見した生物を県RDBのカテゴリ別に整理し、オオムラサキの生息地では繁殖を観察し、同市では生息記録がないカトリヤンマのヤゴ・成虫も発見しました。希少な生物が地域に豊富に生息している理由を考えて、生物・環境・生態系への関心を高めています。生徒たちは、自然環境の保全に必要なことを検討して、学習発表会等で呼びかけています。
- ④ 「わたしのフィールドノート」(望月政樹さん) 富津市鹿野山の観光牧場周辺は生物多様性の豊かな地域であり、昆虫の観察・記録をしているうちに多くの生物に興味を広がり、そのフィールドノートを個人ブログに記録されています。
- ⑤ 「淡水生物の調査と観察～特に淡水エビについて」(依田彦太郎さん) 県環境研究センターの研究者として、最終処分場の下流水域にいる淡水生物を調べているうちに、生物で最終処分場の安全確認ができないかと研究し始めました。指標となる生物の選定を検討する中で、淡水エビの同定マニュアル等を作成して、生息地を調べるなど行ってきました。

調査団写真コンテスト

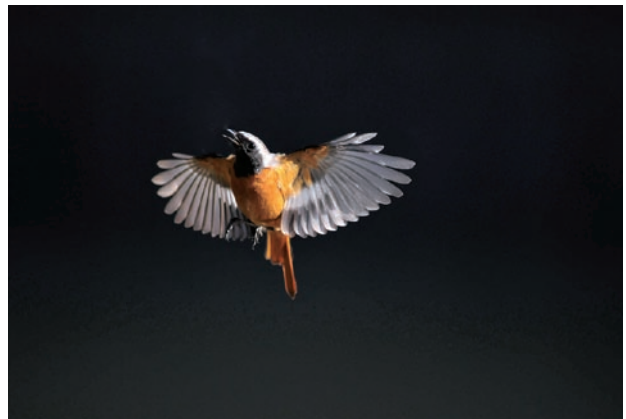
フォーラムの最後には、団員から寄せられた写真をフォーラムの参加者が当日投票する写真コンテストの上位2者の表彰を行いました。

生命のにぎわい調査団では、このフォーラムの他、年2回の現地研修会を行ったり、調査団通信をお送りして情報共有等を行っています。生き物に興味がある方は是非入団して、情報を提供していただきたいので、よろしく願います。

(生命のにぎわい調査団の詳細や入団については、千葉県生物多様性センターのホームページをご参照ください。)



最優秀賞：ジムグリの幼蛇



優秀賞：ジョウビタキの飛翔

第3回「企業と生物多様性」 セミナー開催のお知らせ

生物多様性は、企業などにとって、マーケティングのチャンスにも、企業存続の危機を招くリスクにもなりえます。生物多様性について勉強してみませんか。

日時：平成22年4月19日(月) 14:30～16:30

場所：千葉県教育会館 501会議室

内容：講演(原料調達における生物多様性の保全の取組の紹介など)

申込方法などは千葉県自然保護課のホームページ等でお知らせします。また、企業の方でなくてもご参加いただけます。

問合せ：千葉県自然保護課 (043-223-2957)

発行

編集

千葉県環境生活部自然保護課 生物多様性戦略推進室 生物多様性センター

〒260-0852 千葉市中央区青葉町955-2 (千葉県立中央博物館内)

TEL 043 (265) 3601 FAX 043 (265) 3615

URL : <http://www.bdcchiba.jp/index.html>